Gôkan:(No. 003)
Asjikaga Ginu.
Part 2. Book 14--20.

足利義政 第 十四編

へ 13
3841
7

足利絹手染紫

第十四編笠亭

仙果作梅蝶樓

國貞画癸丑夏

錦耕堂蔵書

外題曲五團扇

門へ13
號3841
卷7

足利絹第十四編上冊

笠亭作　楳蝶樓画

永禄四年三月晦日
將軍義輝卿三好
筑前守義長方へ
御成の記り

御鐙御紋香圖云〻

かうのづとりゆうみ
はくるとこ三百年
いまのなごみあり

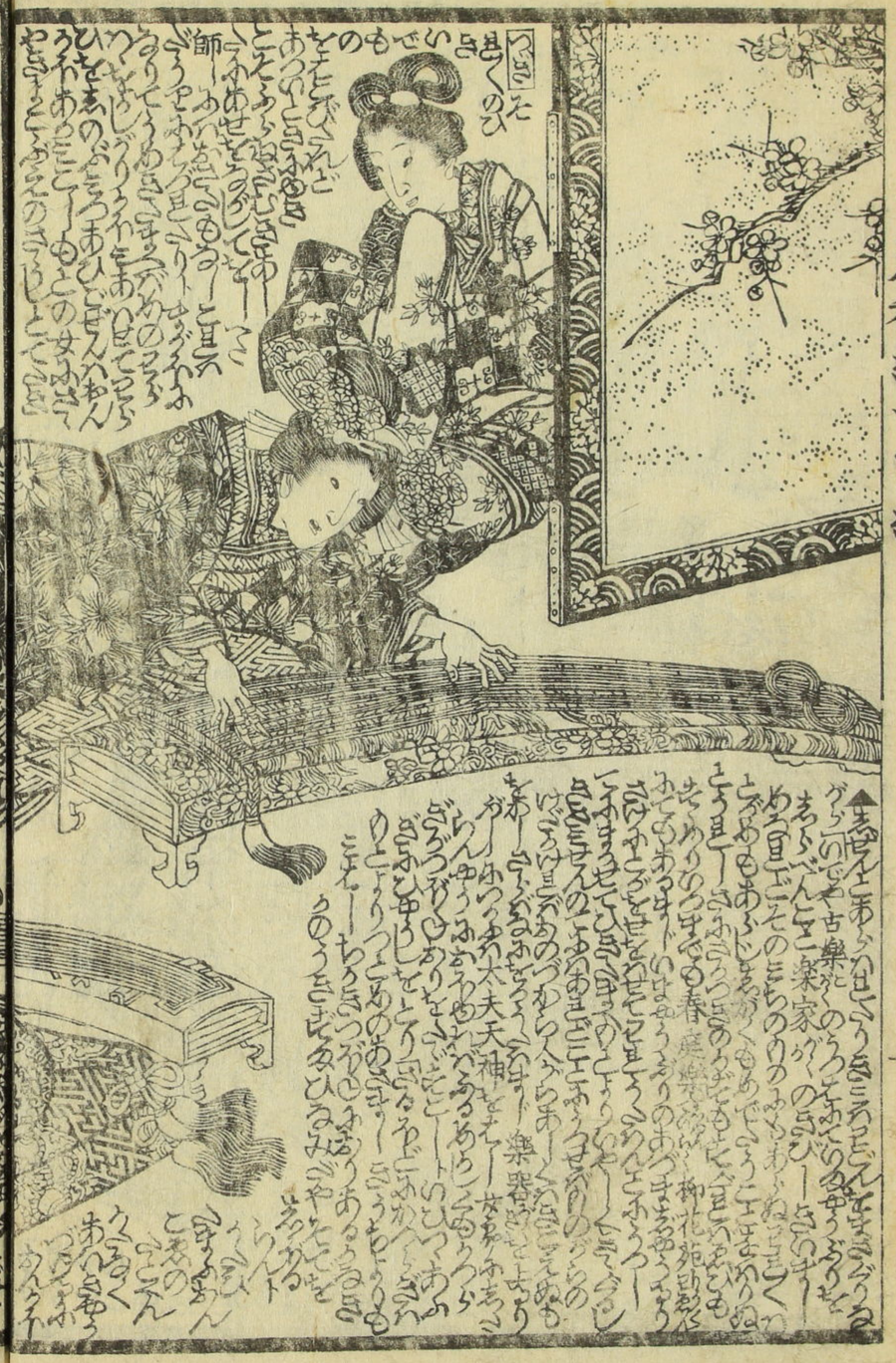
神田太田屋利行

無形と有形ハ造成〜定紋文様ハ用ふ物ハ三巴と源氏の巴より卦木ハ二箇と組
乾為天坤為地ゑどゝ名もまぎ〜〜漢めくれば儒者ゑ醫師の掌歸ふとでみれど香圖ハ
巻の名ハ都雅ふつまて自然其形容も風流ゑれば衣服調度の縫箔蒔繪武具馬具ふさ〜
是をつけて古来今ハ廢らぎれと幼稚人ハ五種ハ香の断續を真分ゑ記號がかゆうれ形ふゑる由ハ辨へ
知らぬもの不来圖のゑ桐壺と夢浮橋と補ふ為巴ゑ抱さ〜記しゑ百人首の教龜頭ゑ
而ゑ抱も偽ゑうと矢〜振ゑる僕ゑ〜め源氏ハ好物故數回讀實ふ奇絶と感ゑ〜めゑら講釈さ〜
ゑも注とゑ〜ゑ分解條ハ十ふ九ゑ是源氏讀の源氏ゑ〜〜ゑ〜ゑ〜ゑれ妥ふ我師一亘湖月
の光と千里鏡と移取ゑ〜〜ゑ〜ゑ賴朝義經の外ふ源氏の君ゑゑと犬打孩兒すで知ゑる
ゑ〜源氏不讀の源氏ゑり數多出来ゑるそいとめでさき是ゑ高さを卑きふ下し花の梢ゑ
折ゑ〜折ると柏之助ゑ新通譯ゑふ到ゑて裴明〜弥勒む拾遺の愚作ゑ彼責トゑ
巴ゑのあゑらめ〜卦ゑゑ當ゑゑハ景近江の海浅ゑゑぬ御引ゑふ手習夢浮橋
すで當巴ゑふゑゑのと今ゑゑ只顧祈ゑふゑ

癸丑孟陬良辰

笠亭仙果記

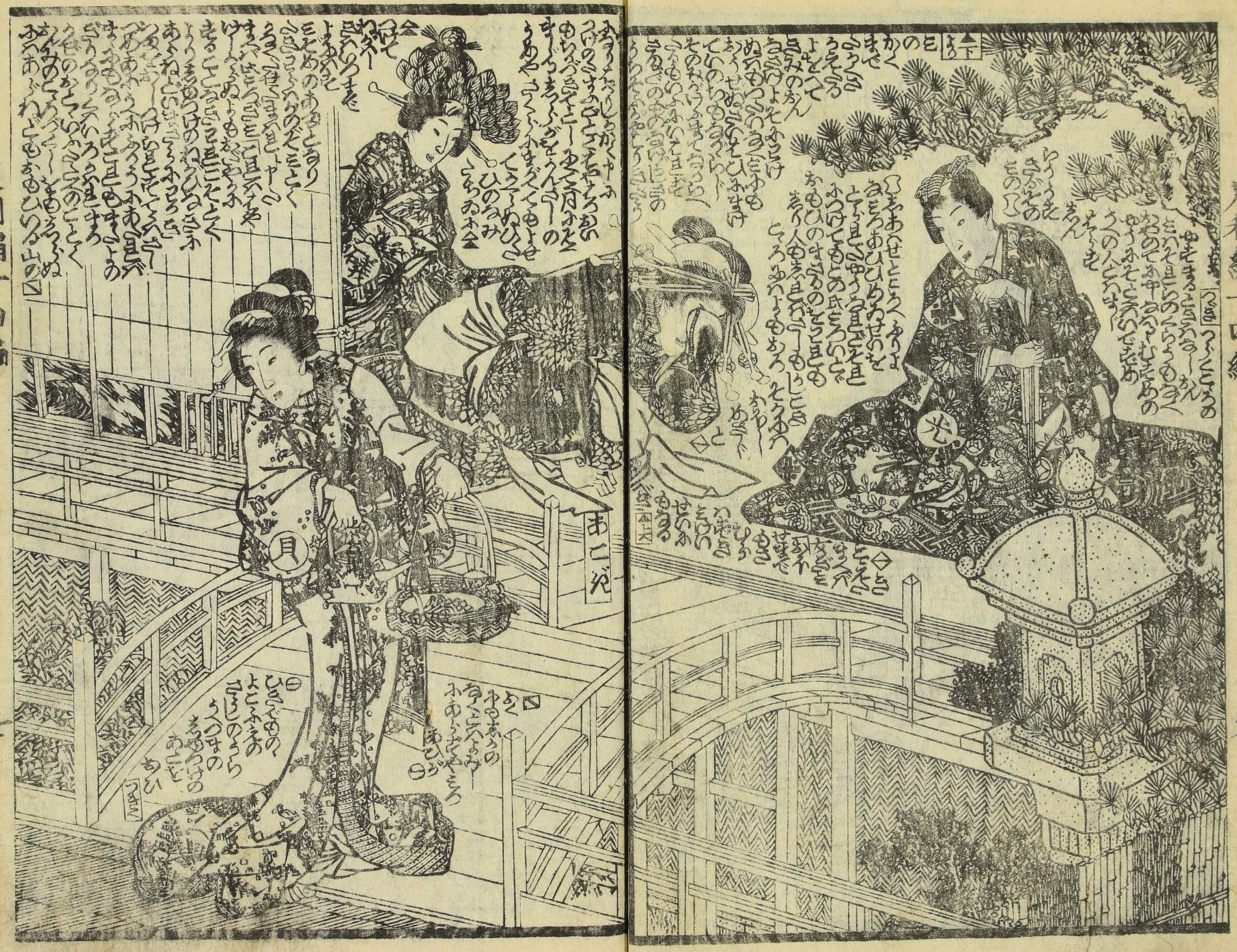
三炷目トツヅク

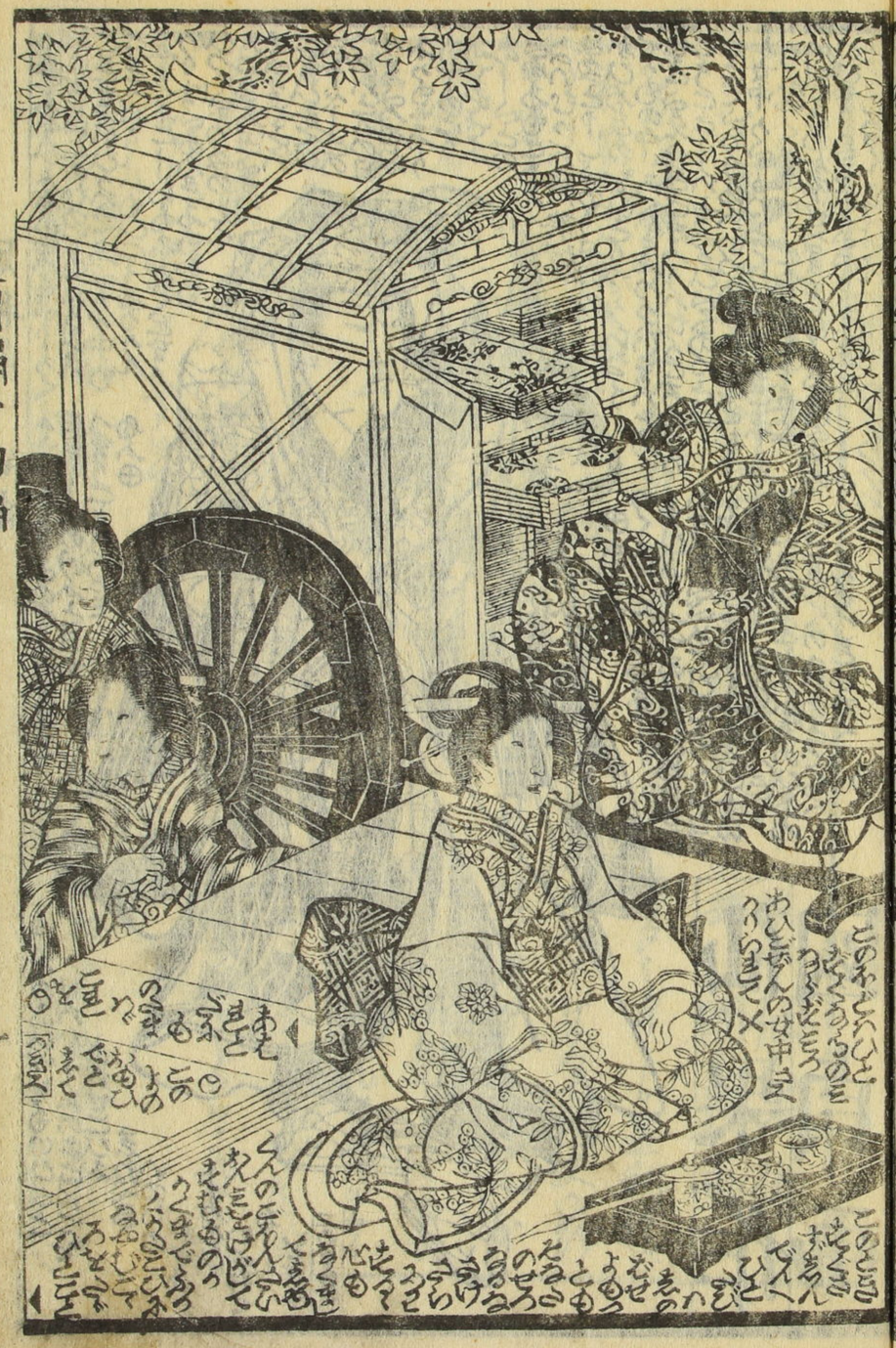


作者や女楽
の夜けち

一代男後日四番町
出仙果摸
氏

光


月
光



足利絹手染紫

自十二編
至十六編

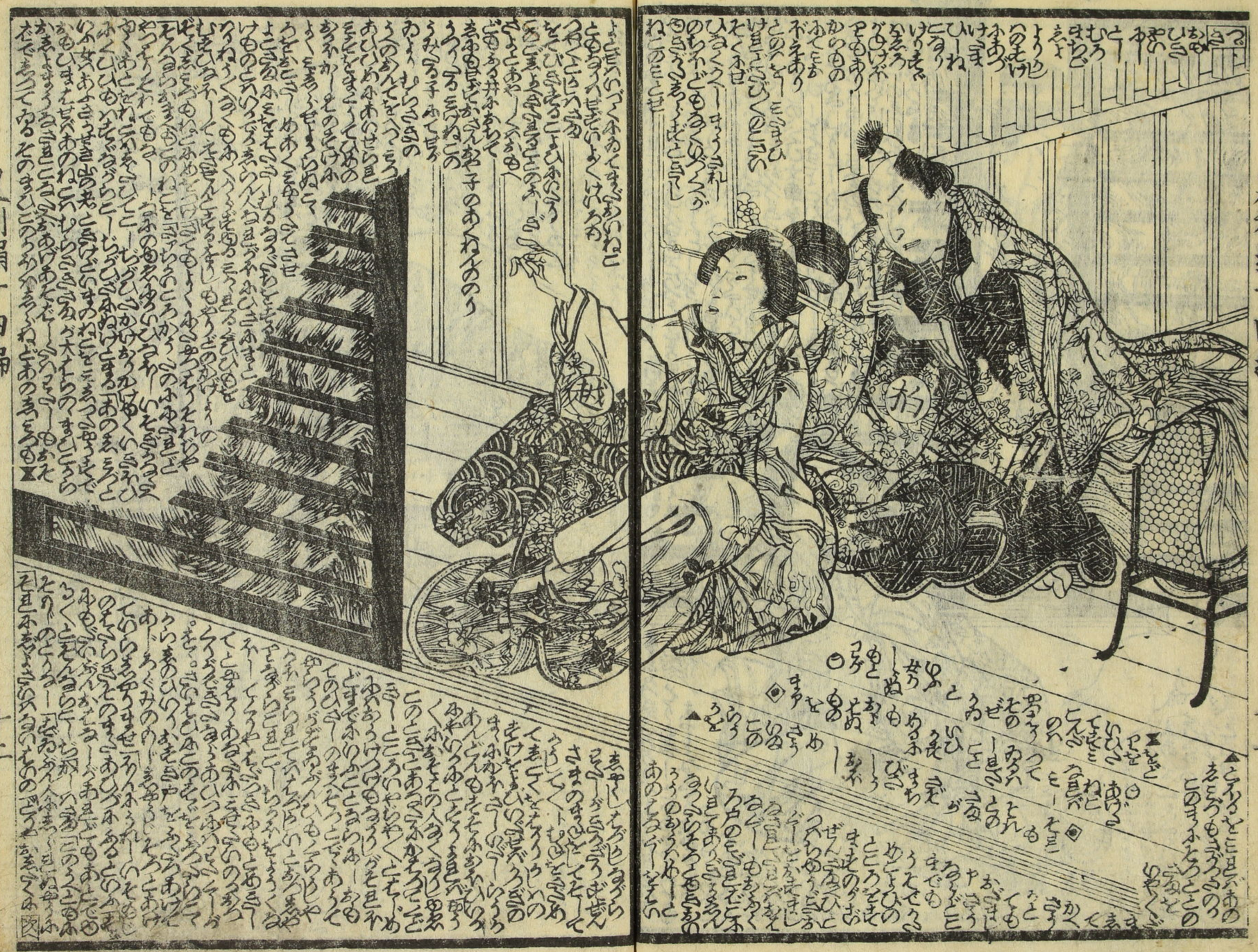
仙果作
國貞画

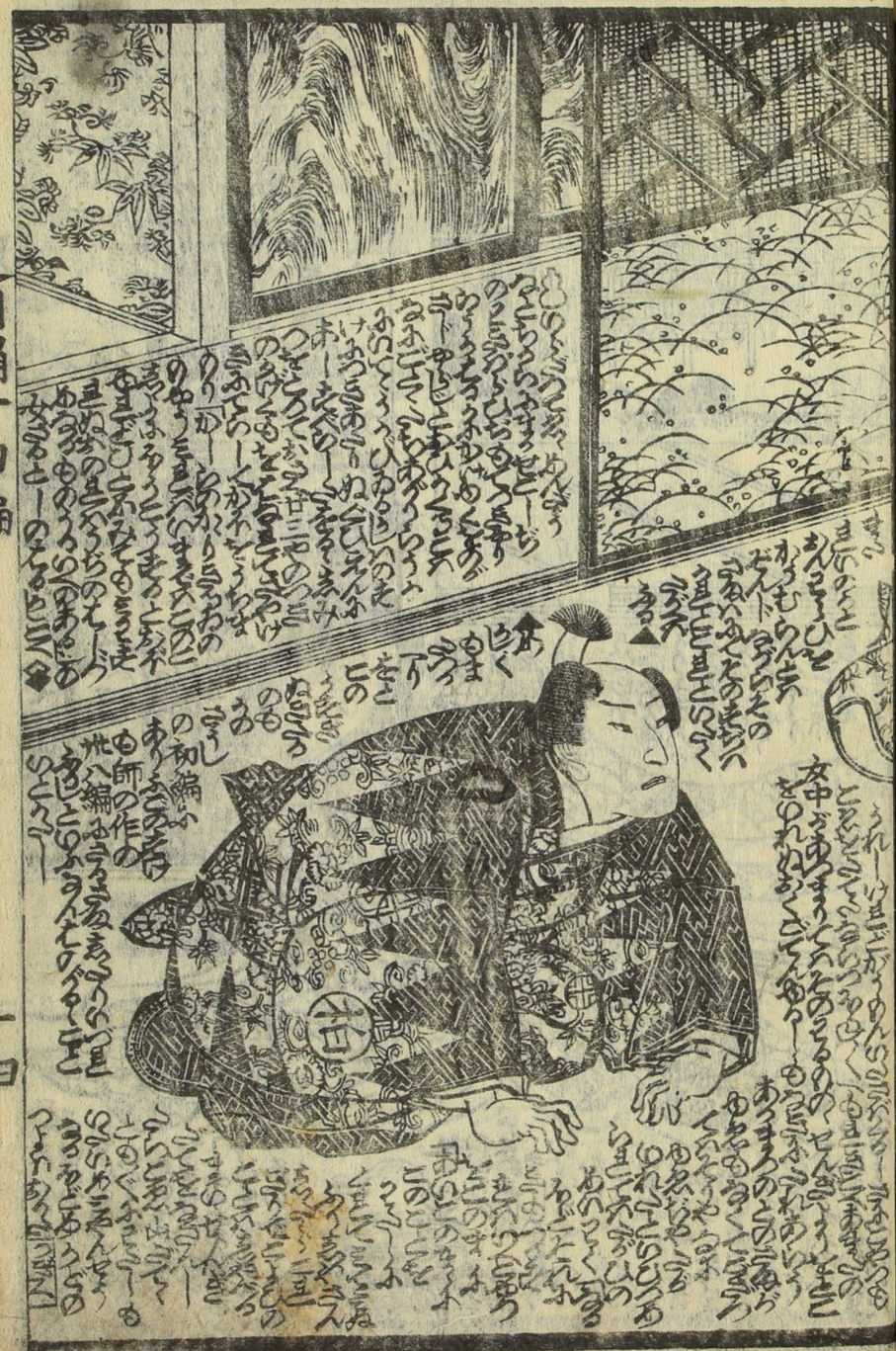
右の紙ふぶ新流行と身世上似寄の足利絹手
染紫と云人世に有り其山に用る所の紫と
中世より其由緒那傳とは其紙に見と自根と種を用ひ人名根る大方
自然者れ五よ之強持見が美の中より出る
故手元八世に有り他と織り自分と染る根りに根律流成れ紙を出る
事文面ふかく沈むそれ文世秀異師の言葉とひとく
ふれし所に見出せ此はの光様を結者と出る俳者と
おいて大悦と申 世に名に孔雀此中
發 五新堂

神田 錦林堂 武井某敬

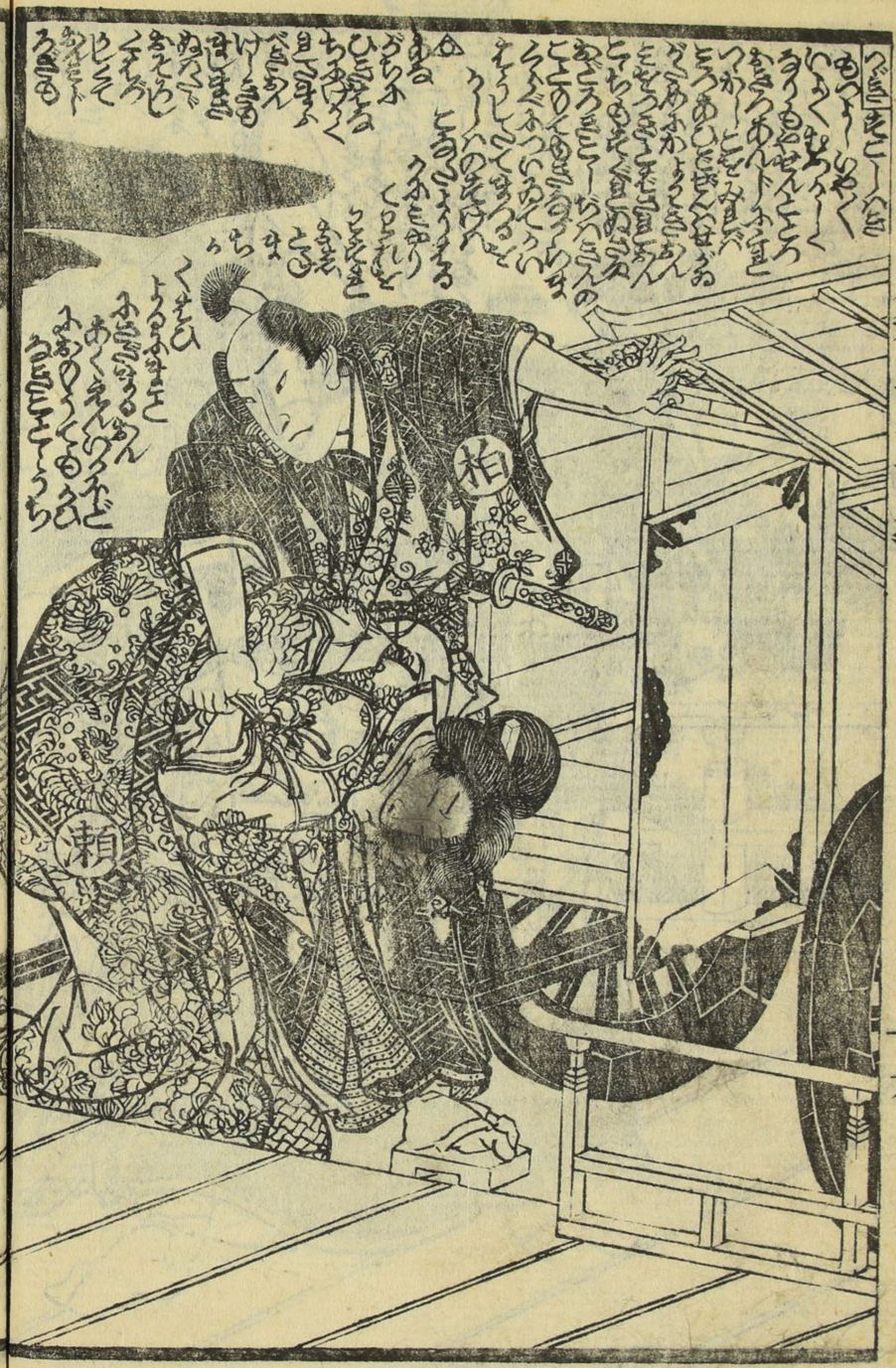
十四編下

音究の形勢
寸法畧之
仙果化
国貞画
彩林堂
梓
第十四編
下巻
和琴柱之圖
根枝をもて
つくる
木口
三分
高二十二分
琴軋之圖
ことさらに撓うべ
水牛角をもて
つくる
長二寸五分
厚五厘
右樂家孫七巻ふうんそうう
三
足川娟竹四編
十一



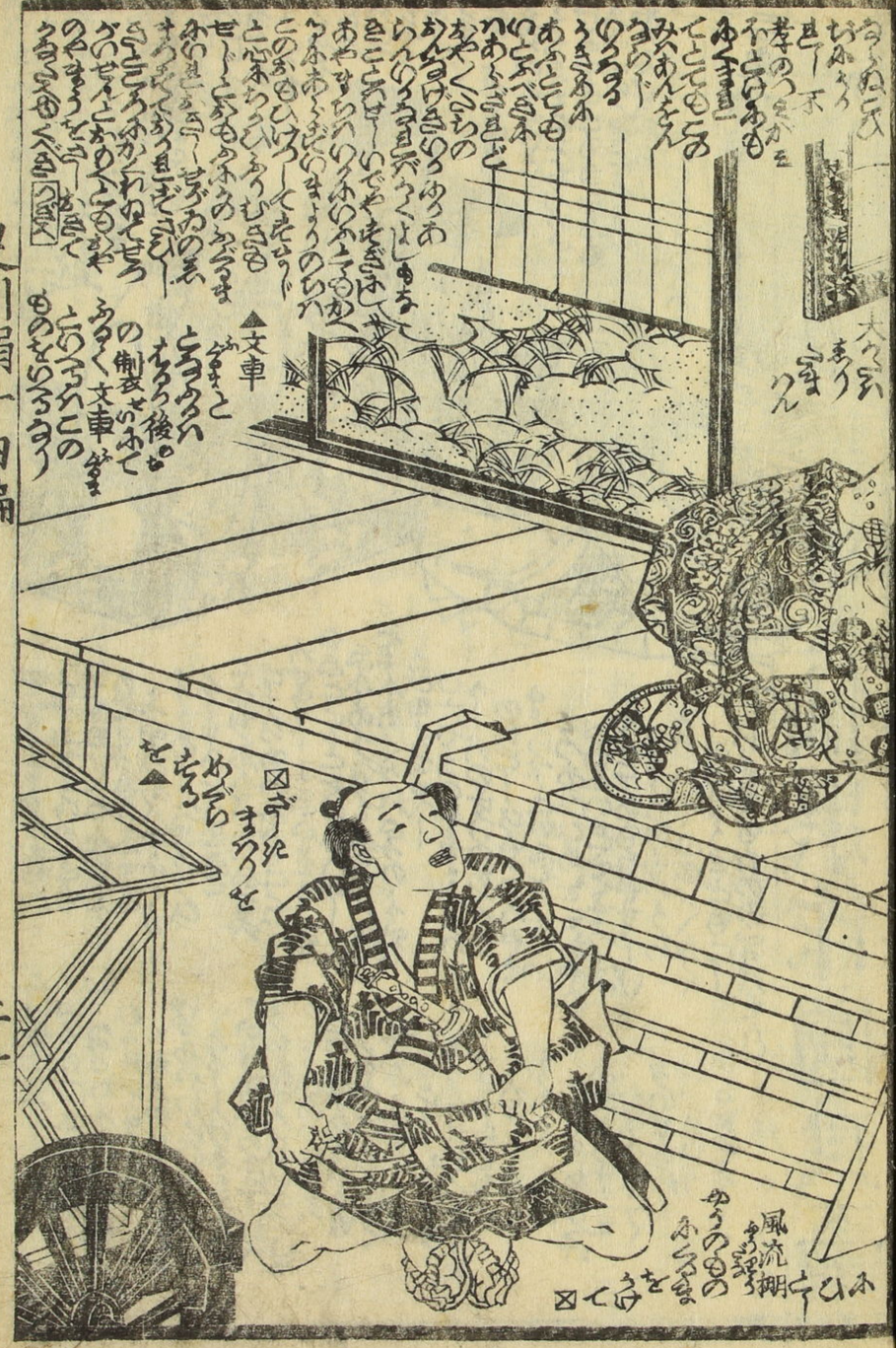


足利絵十四編
十五
越
足利絵十四編
十六
柏
瀬


柏
頼

能諧源氏とりよく書をとるふ物語の大意を耳近き
語もてそやくかきとり贈答の詠哥ハ五くく蔓句ハ
此若菜の下ハも
先師もこれもや原うれけん
花ちるの中さやうにこそうぐこひもぐるよあら君　かへ木
花ちるの中さやうにこそうぐこひもぐるよあら君　女三宮
つゆぐもに我身ハ秋の佳ものもあり株用く本編のつくるたとも聊へ
この男の佳ものもあり株用く本編のつくるたとも聊へ
灰毛の野ト猫ハ真紅の組紐つけるやうあて
十七文字を例のごとく苦楽して他力を借りて
老婆ハ
作者仙果ひとりごと

柏



仙果作　國貞画

新刻
校合　御江戸昌平町鑑　朱字細注横本　毎月改正　仕入帳　半紙摺　薄用摺　全一冊

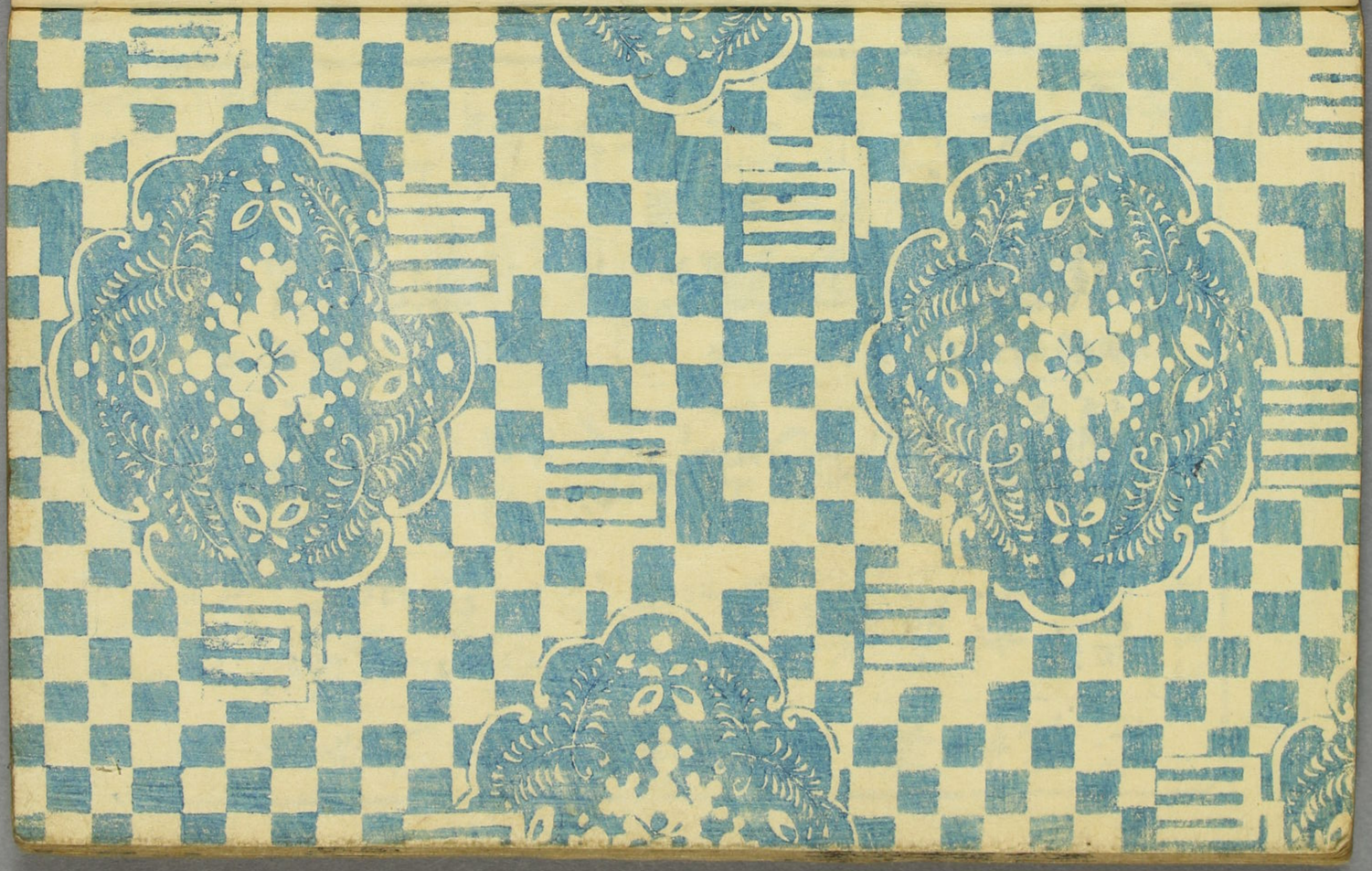
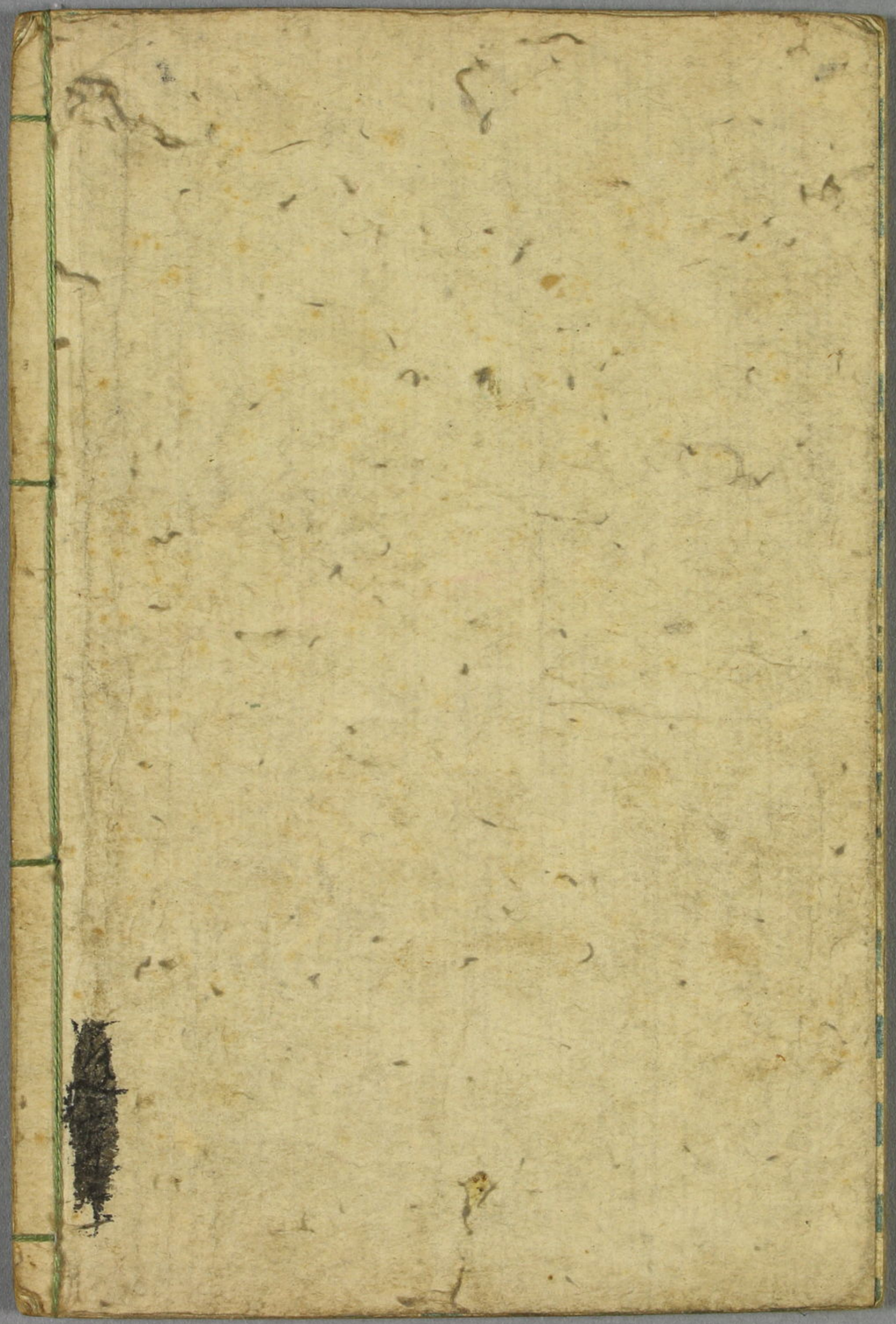
校正　三座役者似顔見世番付　彩色一枚摺　毎月改正出板

西筋戀往山道　全二冊　應賀作　國芳画

嘉永六丑年新彫

龜鑑浦島草紙　初編　笠亭仙果校合　二編　柳齋琴繁作　錦朝樓芳虎画

東山奇談　娚娜櫻　種吉作　芳玉画

いのしゝ　深上大双六　極彩色上仕立　芳藤画

刊行書肆　東都神田鍛冶町　太田屋佐吉